大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十卷　第五號

昭和十年五月一日發行

論叢

傭人税に就きて……法學博士　神戸正雄

利子の社會的説明……文學博士　高田保馬

第三史觀の可能性……文學博士　米田庄太郎

時論

日支貿易の促進について……經濟學博士　谷口吉彦

研究

ロッシヤーにおける國民經濟の意義……經濟學士　白杉庄一郎

百貨店出張販賣存續の條件……經濟學士　堀　新一

株仲間の信用保持機能……經濟學士　宮本又次

説苑

中島治平と山口藩の洋式工業……經濟學士　堀江保藏

カルテルと景氣變動……經濟學士　田杉　競

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

研究

ロッシャーに於ける國民經濟の意義

白杉庄一郎

一

さきに私はロッシャーの歴史的方法を吟味した。[1] 進んでこゝに彼の方法論の奥底にある、國民經濟學の對象規定としての國民經濟觀を見たいと思ふ。問題は彼に於て國民經濟が、人間觀的・社會哲學的並に歴史哲學的に如何に基礎付けられたかに在る。以下この三の問題に對する解答を尋ねて、終に若干の批判を加へる。先づ人間觀的基礎から述べる。

ロッシャーは『國民經濟學原論』を「吾々の科學の出發點並に到達點は人間である」[2]といふ句をもつて始める。而して彼は人間を全く種々の非經濟的動機からも動き、特定の民族・國家・時代に屬する等々の如く、あるがまゝの人間を考へる。[3] 從つて人間生活は全く多面的であるが、その内から彼は經濟生活を抽き出す。そのために彼は人間の欲望から出發する。言ふところはかうである。人間は誰でも肉體的並に精神的の無數の欲望を有つてゐて、その總體は必要と呼ばれる。この眞

1) 經濟論叢、第40卷第1號、「ロッシャーの歴史的方法」
2) Grundlage der Nationalökonomie, 26. Aufl. durch R. Pöhlman, S. 1.
3) a. a. O. S. 68.

の人間欲望の直接的或は間接的な充足に役立つと認められてゐるものゝ總てを財と名付ける。そして「人間の必要を外的なる財に於て充足せんとする人間の計畫的活動」が經濟である。[4] ところで、「財が經濟活動をなす人間の目的意識に對して有してゐるところの意味が財の經濟價値である。」經濟價値は、先づ財が與へるところのものとして使用價値であり、次に財が要費する所のものとして、卽ち財を獲得するための人生の快樂及び生活力の犧牲として、それは費用價値である。經濟の合目的性は前者を最大にして後者を最少にせんとする所に在る。[5] 人間が交換に於てなすところの使用價値の費用價値との結合に基いて交換價値卽ち財の他財に對して交換されるといふ目的に對する意義が發生する。[6] 又經濟財の總計が總體としての富卽ち財產であり、大なる出來るだけ持續的な財產の所有或は客觀的にはかゝる財產そのものを富といふ。[7] 價値論の詳細は別の問題として、とも角彼は、あらゆる正常な經濟は—單なる技術から區別して—一般的抽象的には最少の費用を以つて最高の人的效用を獲得するといふことに向けられてゐると考へる。

右の如く經濟生活を規定した後ロッシャーはその根底に二の精神的動機を觀る。第一は利己心 (der Eigennutz; selfinterest) である。「それは積極的には出來るだけ多くの財を獲得せんとする努力に、消極的には出來るだけ僅かの財を失はんとする努力に、卽ち獲得慾 (Erwerbtrieb) と節約性 (Sparsamkeit) とに表現される。罪ある墮落に於ては利己心は利己主義 (Egoismus) に、獲得慾は貪慾 (Habsucht) に、節約性は吝嗇 (Geiz) になる。(カントの唯我主義 Solipsismus)。その經濟狀態を

4) a. a. O. S. 1–5.
5) a. a. O. S. 9–10.
6) a. a. O. S. 12.
7) a. a. O. S. 17–20.

改善せんとするこの衝動は、それが現はれる所の形態と度合とは非常に異つてはゐるが、總ての人間に共通である。それは各人を生れてから死ぬるまで導き、抑へられはするが、全然抑へられて了ふことは決して出來ない。それは經濟的領域に於ける肉體的生命に對する自己保存の本能（食慾・性慾等）たるものである。創造・保存・更新の强力な原理。」第二の動機は、「吾々の內部に於ける神の聲の卽ち良心の諸要求（die Forderungen der Stimme Gottes in uns, des Gewissens）」であつて、それを彼は『公正・法・好意・完全性・內的自由の理念』或は『神の王國への希求』と名付けてよからうと言ふ。「多くの人々に於て神の影像が如何に影うすくなつてゐようとも、何人に於てもそれへの憧憬は跡形もなく消滅して了つてはゐない。この傾向によつて利己心は制御される、否利己心は一の永遠に理想的な目的に對する現世的に聰明な手段にまで淨化される。[8]」

かくてロッシャーに於ては經濟活動の精神的動機は利己心と良心とである。兩者は外見上對立するかに見えるが、聰明な利己心はその要求に於て問題の範圍が廣く將來が洞察されるに從つて良心の要求に一致すると考へられる。[9] ところで彼はこの對立的契機を公共心（Gemeinsinn）に於て統一する。「宇宙に於て所謂遠心力と求心力との一見對立した力が天體の調和を齎す如く、人間の社會生活に於ては利己心と良心とが公共心を齎す。」この公共心こそ人類の團體生活の基礎であつて、この上に段階的に家庭・公共團體・國民・人類生活（敎會生活）が成立する。宗敎生活もこれによつて可能となる。而して利己心と公共心とは矛盾するものではなく、却つて、「公共心によつ

8) a. a. O. S. 25.
9) Roscher, Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland, 2. Aufl. S. 1034.

てのみ利己心は眞に確實となり、繼續的に合目的々となる。」その例として彼は擧げて言ふ。「單に勘定を事とする悟性」でさへも、多くの施設等は諸個人に有用否必要なものであるが、公共心がなければ誰もそれに必要な犧牲を負擔しないだらうから、全く不可能に終るといふ事を認識せざるを得ないのである。同樣に又流通が總ての人間的利益を種々に組合はして以來、人が他人に對して彼等の欲望充足に役立つ場合が、普通自己の欲望を充足する最も確實な方法となつた。利己心からさへ各人は、彼が最少の競爭者と最大の買取人とを、卽ち、「最大の國民欲望とそれに對する最少の充足手段」とを豫見する職業を好んで選擇する。例へば醫者の中で最大多數の患者を最も巧に癒す者、工業家の中で最良の商品を最も廉價に生產する者が普通最も富裕となるであらう。[10] 而も單に瞬間的なものに關する私的利益が一生涯のものに、否、世襲的なものになればなる程普通には一層全體利益に一致する。[11] 斯樣にして人が詳細に研究すれば利己心（エゴイスムスではない）と公共心とは同格の對立をなすものでなく、まして遺漏なき對立をなすものではないことを知るであらう。[12] 要するに公共心は利己心と良心との統一にして、一方の極に利己心を他方の極に良心を有する中間である。曰く、「尙人は如何に公共心の狹い圈が外的に利己心に、而して廣い圈が神の王國への憧憬に近いものであるかに氣付くであらう。而もすべてこれらの圈は互に制約し合ふ。祖國愛なき萬民主義或は敎會狂（der Kosmopolitanismus od. Kirchenneifer ohne Vaterlandsliebe）、公共團體への誠實・家庭愛なき愛國心は疑はしいどころかそれ以上である。而して反對も亦同樣

10) Grundlage. S. 26.
11) a. a. O. S. 28. Anm.
12) a. a. O. S. 27. Anm.

である。これが大きな外觀上の對立の間の主要な橋である。」[13]而して利己心は良心に比して强力である。それ故良心を利己心に對して强力ならしめるために、公共心は客觀化されねばならぬ、それが團體生活の「個人や瞬間の肆意に優越した永續的施設並に秩序」(例へば家庭に於ける夫婦關係・教育)である。[14]

扨ロッシャーは利己心と公共心とをもつて經濟活動へ立歸る。そして彼は利己心の側に個別諸經濟 (Einzelwirtschaften) を、公共心の側に共同經濟 (Gemeinwirtschaft) を發見する。曰く。「公共心によつて、良心なき利己心が個別諸經濟の間に惹起するであらう所の、永遠の總てを破壞する戰爭、卽ち萬人の萬人に對する戰爭 (bellum omnium contra omnes) は、一のより高き整頓せる有機體(ein höherer, wohlgegliederter Organismus)にまで宥和される。それに基いて、共同經濟の種々なる形態と段階とが、卽ち家庭經濟・組合或は聯合經濟・自治體經濟・國家經濟・國民經濟が存する。而して一部分その成員に對する强制權力を必要とする所のこの共同經濟は、個別經濟の全く本質的な前提及び補完 (wesentliche Voraussetzung und Ergänzung der Einzelwirtschaft) であつて、從つて後者は前者なくしては全然存立し得ないか、或はたゞ最低の發展段階に於て存立し得るに過ぎぬか、であらう。」[15]—つまり、經濟活動を利己心の側から觀れば個別經濟にしてその結果は個人の富卽ち私有財產であり、公共心の側から觀れば共同經濟にしてその結果は家庭・國民等々の共同の富である。而して價値の觀點から前者には交換價値が、後者には使用價値が支配す

13) a. a. O. S. 26.
14) a. a. O. S. 27–28 Anm.
15) a. a. O. S. 30. 尙、Grundriss zu Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach geschichtlicher Methode, 1834. には利己心に對立するものを良心とせず、公共心として、直接に公共心から國民經濟を導出してゐる。「財產の獲得・增大・利用に對する繼續的活動を吾々は經濟と呼ぶ。それには精神的動機とし

るとロッシャーは考へる。[16]

所で所謂國民の富は共同性といふ觀點からは全く抽象的なものであつて、彼は「財産共同 Güte-rgemeinschaft」を承認しない。そこに吾々は今まで利己心に對して公共心を强調したロッシャーが却つて公共心に對して利己心を辯護するのを見る。彼は社會主義を「公共心を超えた共同經濟」を說くものと考へ、所謂國民經濟學と區別するのであるから、この點は特に重要である。[17] 動物や天使或は「眞の愛によつて結合されてゐる人間」に於ては財産共同は危險なく存在し得るであらうと、原始社會及び理想社會に於けるその可能を是認した後、然し大きな社會に於てはかくの如き愛は、勿論、最も高いが、めつたに長續きはせぬ宗教的熱誠——使徒行傳(アポステルゲシヒテ)は最もよく知られた、最も美はしいその例である——に於てのみ發見されるに過ぎず、現實の人間は利己的であつてより少く働きより多くを享受せんとするであらうから財産共同は危險である、として原則として之に反對する。[18] 而も彼は正しくも、未開社會・中世に財産共同が存在したこと、更に現在に於てもそれが增大しつゝあることを認め、その擴大の限度を尋ねて公共心の伴ふ限り有益であると答へ「それ故に」とその例に言ふ、「藝術及び文學に於ては强者をして喜んで而も弱者に最大の結果を與へつゝ働かしめる所の非常に尊き共産主義が支配してゐる」と。續けて曰く。「財産共同への接近は富者の愛から出發すべきであつて、貧者の憎惡からすべきではない。若し總ての人間が眞の基督者であるならば財産共同は危險なく存續するであらう、勿論そうであれば私有財産ももはや

て利己心と公共心とが基礎に横たはる。利己心だけでは一の永遠の、個々の私經濟の總てを破壞する戰爭を惹起するであらう。然しそれを公共心は一のより高き有機體卽ち國民經濟にまで宥和する。」(S.3-4)

16) Geundlage. S. 17-19.
17) a. a. O. S. 217. Anm.
18) a. a. O. S. 233 ff.

何らの暗黑面をも有たぬであらう、そして特にあらゆる主人は彼の勞働者に出來るだけ多くの賃銀を與へ出來るだけ僅かの犧牲を彼等から要求するであらう――實際私は、悲しむべきことだが、將來今日のドイツ社會主義の計畫へ著しく接近するかも知れぬといふことは全く考へ得ることだと思ふ。それは民主々義的方法によつてではなくて、むしろ專制的方法によつて、卽ち非常に高められた租稅・警察・中央集權・一般に國內に於ける國家の全能によつてである。然しながら、同時に宗教的並に倫理的國民生活の大改革が公共心を强化し醇化することなしにこの發展が起るならば、私はそれこそが近代諸國民沒落の最も重要な原因・結果・徵候だと考へるであらう。[19]」

右の如き考へ方はロッシャーの强調する所であつて、經濟を單に利己心にのみ基礎づけるのは夫婦關係を單なる性慾に基礎づけるのと同じく顚倒してゐるが、又經濟を「愛の原理」にのみ基礎づけるのは不自然であつて、二元的に說明されねばならぬと述べてゐる。[20] 吾々はそこに「人間は惡魔でも天使でもない。理想的動機によつてのみ導かれる人々が甚だ少い如く、而も他方同樣に有難いことには、あらゆる高尙な思慮なしに利己主義にのみ聽從する人もほんの僅かである。」といふ彼の人間觀の貫徹せるを見る。――要するに彼は具體的な人間生活から出て、經濟活動を基礎づけ、その精神的動機の利己心と公共心(良心と同一視して誤りでなからう)なる二面性に應じて、その具體的な姿に於ては個別經濟と共同經濟との二面があることを發見し、この共同經濟の一種として國民經濟を彼の人間觀から基礎づけたのである。次に吾々はその社會哲學的基礎付を見なけれ

19) a. a. O. S. 248–49.
20) a. a. O. S. 29. Anm.

ばならぬ。

二

ロッシャーの謂ふ國民とは一の抽象物又は單に名目的なものではなくて、その部分が相互作用の關係にあり、而して全體として說明され得る作用をもつ所の一現實體 (eine Realität) であつて、單にそれを構成する所の諸個人ではない。[21] 又それは階級を超えそれを含むものである。「國民そのもの das Volk schlechthin」といふのは、支配階級に對立する被支配階級ではなく、兩者を合して、而も生きてゐる世代に限定しないで、國民歷史の初から終に至る最大の擴りに於ての意味である。と彼は或個所で述べてゐる。[22] これらから察するに彼も亦國民を以つて文化の擔ひ手としての意味をもつた一總體を考へたのであらう。[23]

人間とは人間生活である如く、國民はその生活に於て考へられねばならぬ。ロッシャーは人間生活に於て示した如く、國民生活をも具體的全體的に把握する、「凡ゆる生活と同じく、國民生活も一全體であつて、その種々なる表現は最も密接に關聯してゐる」と。所で、國民は總體として國民欲望をもつ。この「國民欲望の外的なる財に於ける充足」或は「國民の物質的關心」といふ觀點から全體的な國民生活を觀る場合、一の特殊の生活域が現はれる。それが「國民經濟卽ち經濟的國民生活」である。[24] 財はこゝではその總計に於て「國民の富 Volksvermögen」として存在し、それは使用價値によつて評價される。——かくの如く具體的全體から抽き出された國民經濟そのもの

21) a. a. O. S. 30-31. 22) a. a. O. S. 76 Anm. Grundriss Vorrede, IV.
23) Max Weber, Roscher u. Knies u. die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, S. 10-11.
24) Grnndlage. S. 42. 從つて國民生活を理解するためには全ての面、就中、言語・宗教・藝術・科學・法律及び經濟の七側面が重要だとされる。その中でも法律・國家及び經濟は一家族をなしとりわけ重要であるが、それらは人間の

を、ロッシャーは「國民の全體活動」として把握する。而してさきに言はれた如く經濟は計畫的活動である。從つてこゝでも最少の國民犧牲によつて最大の國民の富が獲得される樣に、卽ち國民が最も富裕となる樣に計畫される。[25] 然るに計畫的活動は意志を前提する。彼は國民經濟の意志性について言ふ。「かくの如き意志を吾々は個人・又法人・國家に歸するが、全體としての國民にはさうはしない。けれども意志は、精神的に天賦少く教養低き家庭經濟の主人が旣に示す如く、常に完全に自覺的なものであることを要しない。國民經濟の計畫的なものは最も判然と經濟的な法律及び國家施設に現はれる。然しそれは國家の介在なしにも亦慣習法・判例・言語・風習・趣味の共通性等、卽ち經濟的に大なる意義をもち、土地・種族・及び歷史の共通的性質に基き、少くとも國家によつて影響されると同じだけ强く國家に影響を及ぼす所のもの、にも存する。[26]」卽ち國民經濟に於ける意志作用は一切の國民意識の表現に於て捉へられるが、國家施設を中心とする。而して彼は、國家は總ての生活域が何らかの外的なる效力・妥當性をもつ限りに於てそれに關係するものであつて、[27] その目的は文化の進步と共に擴大し、國民の對外的安全・對內的權利保全・諸種の福祉增進の機關であると考へる。[28]

更にロッシャーによれば國民經濟は單に現實體であるのみならず、有機體である。有機體なる概念は曖昧であるが、彼は、國民經濟の說明に有機體を以つて置き換えんとするのではなく、たゞ國民經濟の諸問題の最も簡單な共通的表現を與へんとするに過ぎないと述べてはゐる。然しそ

精神的並に肉體的不完全性に根ざし現世的生活を超えてのその繼續は殆んど考へられぬとされる。(S. 42-33) 又國民生活の一面たる國民經濟は、その全體に影響し又全體によつて規定され、國民經濟にとつても國民の精神は重要であるとされる。(S. 54-55)

25) 國民の富裕は (A) 國民の大多數たる下層階級の快適にして人間的なる生活狀態、(B) 高尙なる欲望充足のための豐かなる消費、(C) 多數の建物・土地改

れは彼の國民經濟觀が有機體說であるとの判定を少しも妨げない。彼は國民經濟の有機體性を云はゞ機械體(Mechanismus)との區別に於て主張する。第一に機械の運動に於ては、原因と結果とが精確に區別される、反之國民經濟に於ては同時的經過が相互に制約し合ふ。例へば繁榮せる農業は繁榮せる工業なくしては不可能である、而も逆に後者の繁榮は前者のそれを前提とする。恰もそれは人體に於ける呼吸と脊髓との相互作用の關係の如くである。ところで相互作用の關係にあると言つたゞけでは說明は循環に終る。それを避けるためにはその相關々係にある二を契機として含むやうな第三の綜合的な實體を考へねばならぬ。それを彼は有機的生命に見る、「もし吾々がかの個々の事實はその表現に過ぎない所の有機的生命の存在を承認しないならば說明は循環する」[29]と。それは分析し難き全體に對する生物學的表現である。右に對する註に曰く。「吾々の分析がその前に立止まつてゐなければならない所の說明し難き背景を人が生命力・種屬典型・國民精神或は神の思想と名付けるかどうかはこの際科學的にはどうでもよいことである。かの背景の存在を承認し、その否定によつて、大抵分析された諸個體よりも遙かに重要である所の、全體の聯關を否定しない所の、自己認識と正直とは一般に一層必要である。同時に私は勿論益々突進む研究によつてかの說明し難き背景を益々遠くへ押遣らんとする科學の神聖な義務を理解しない人々によつてなされる異端視に對して徹底的に抗爭しなければならない。」[30]——第二に機械體は人間精神の產物であるが、「總ての有機體卽ちライブニッツの表現を藉れば「神的機械 göttlichen Maschinen」

貝・道路等の設備、(D)多額の貿易支拂、(E)對外投資等を徵表とする (a. a. O. S. 21-23)　26) a. a. O. S. 31.
27) a. a. O. S. 42.
28) a. a. O. S. 248. ロッシャーが原論に國家を說くところは極めて尠い。
29) a. a. O. S. 34.
30) a. aO. S. 37. Anm.

に於てはそうではない。生理學者が消化及び生殖の眞の理論に到達する以前數十世期を通じて人間は消化・生殖し來つた。[31] 恰もその如く、國民經濟も亦人間精神の發明・發見に係はらざる一の自然的產物である。かくて有機體としての國民經濟は國民と共に發生・成長成熟・衰弱し、又疾病に罹る。[32]——然らばロッシャーは有機體としての國民及び國民經濟とその他の有機體との差異を何處に求めるか。第一に結合の度合が異る、卽ち國民經濟は例へば人間の肉體と同じ程度に自然的に結合されてはゐない。第二に國民生活に於ては個々の器官が「自由なる理性的存在」、卽ち「まさにそれ故にその良心に對して責任的であり、そしてその總體が進步可能の種屬である所の理性的存在」であるとされる。[33]

要するにロッシャーの考はかうである。國民經濟は自由なる理性的存在としての諸個人をその器官とし、その諸器官は單に全體を支持するのみならず、全體によつて支持される所の有機體である。國民の總欲望は國民の總活動によつて充足される。各人は彼の土地・勞働力・或は資本を全體のために使用し、彼が受取る所のその生產物種類の生產に寄與したか否かは問題としないで、國民の總生產物から分前を受取る。この分前を以つて自己の生活の維持發展を圖ると同時に、共同生活の支出の負擔にあてる。[34]

尙國民は他の諸國民との聯關に於て生活する。そこに人類の生活がある。人類の生活が一の全體であるとまでは、ロッシャーは斷言しない。從つて經濟生活についても統一的な世界經濟が準

31) a. a. O. S. 34.
32) a. a. O. S. 40–41.
33) a. a. O. S. 34–35.
34) a. a. O. S. 149–150.

備されつゝあると述べてゐるに過ぎぬ。(註)而して國民經濟は私經濟と世界經濟との中間に位すると考へる。[35] 又「世界の富 Weltvermögen」の存在を觀てゐるが、それは國民の富と同じく使用價値によつて評價さるべきものとする。[36]

(註)「人類の經濟即ち世界經濟に關しても現在言はれ得る精々のことは、それに對して重要な準準がなされて來たといふ事が示され得るといふ事である。吾々は科學のいや增す萬民的性質・勞働の增進しつゝある國際的協同・運輸方法の改善・移民の增大、大なる平和の愛好、諸國民の偉大なる寬容、等によつてそれに一層近づきつゝある。[37]」

三

次にロッシャーに於ける國民經濟の歷史的規定を明かにせねばならぬ。彼にあつては國民經濟は國民生活の一側面なるが故にその歷史的發展は、國民の發展と軌を一にする。曰く。「國民經濟は國民と同時に發生する。それは人間によつて發明されたものではなく、又神によつて超自然的に敎へられたものでもなくて、人間をして人間たらしめる所の素質と本能との一の自然的產物である。一の孤立して生活する家族の內に總ての國家活動の萠芽が示される如く、あゆる獨立の家庭經濟は總ての國民經濟的活動の萠芽を含んでゐる。——その國民と同時に國民經濟も亦成長し開花成熟する。……最後に國民經濟も亦その國民と共に衰弱する。[38]」國民經濟の衰弱・沒落について彼は『原論』の結論に可成詳しく論じてゐる。卽ち、如何なる國民經濟も無限に進步し得ないといふ事は、一般的に容易に考へられ得る、尤も個々の場合にその限界を示すことは困難ではあるが。近代無限の成長に對する迷信が廣く行はれてゐるが、一體不斷の發展は全世界が一大帝

35) a. a. O. S. 151.
36) a. a. O. S. 17–18.
37) Grundlage. 17. Aufl. S. 26. Pöhlann の版はこの一句を削除してゐる。
38) a. a. O. S. 40.

國となつた場合にも困難であらう、まして現實に於てはそれは次の二の事情によつて不可能である。第一に、工業國と農業國との間の國際分業の破壞、高度文明國と低度文明國との世界市場に於ける競爭、それに伴ふ戰爭。第二に高度文明國の內部に於ける障碍。「分業が完成してさへゐる所であればそこでは進步するために吾々が打棄てねばならぬ所の舊い狀態が固有の階級利益をもつた一定の階級に固定されて了つてゐる。今やその階級は進步に反抗する、進步を完成するためには鬪爭が必要である。而してかゝる狀態の下に必要なる改革を徒に遲延する事は、以後有益なる進步に對してもはや興味も力もなくなるといふ程に、國民の精神を不具にし或は毒する。」[39]かう言つた後で彼は國民經濟沒落の斷定を躊躇して一國民の人種的社會的結合・精神狀態・憲法改革の良否によつて之が避け得られるとし、國民の倫理性を破壞する人口過剩・資本過多の弊にしても同樣にして、國民の精神力が危機を打開せしめ得ると考へてゐる。[40]

尙ロッシャーは周知の如く生產要素を標準として國民經濟の發達段階說を立て、それを夫々自然・勞働力・資本の支配的なる段階に分つのであるが、これは國民經濟が右の如く發生してから沒落するまでの間に於て辿るものと解釋すべきであらうか、彼は古代國民はその最も發展せるものに於ても第二段階を超え得なかつたと述べてゐる。[41]又彼が生產要素を以つて經濟發達段階の標準としたからといつて、彼が生產要素を以つて經濟發展の原動力としたと考ふべきではない。彼にあつては經濟發展の原動力は國民經濟のもつ有機的生命力である。こゝに、適當に史觀と謂はれ

39) 又或個所では「最も富裕の時期は沒落に導くのが常である」と言つてゐる。(a. a. O. S. 55)
40) a. a. O. S. 861–63.
41) a. a. O. S. 137–38.

得るものが史的發展の統一的原動力となす所のものを原理として行ふ劃期と、所謂經濟發達段階說が必ずしも歷史進行の統一的原動力ではなくて、その一契機を標準としてなす劃期との間に根本的差異あるを見るのである。

國民經濟は國民と運命を共にすること右の如くであるが、然らば國民そのものは如何にして發展するか。ロッシャーが國民生活の經濟的構造を以つてその發展の原動力としないことは明かであつて、國民全生活域の相互作用によつて進展するとしたと考ふべきであらう。又國民生命（內容）と制度（形式）との相互作用、或は階級的黨派の勢力關係によつて歷史は進步すると見たと解せられぬ節もないではない。然し彼が結局に於て落着く所は神によつて造られた有限な有機的生命である。だから國民も亦發生・成長成熟・滅亡する。老衰・滅亡について彼の說く所は可成詳しい。今その詳細に立入るを得ないが、彼の思想の根柢にあるのは、「總ての現世的存在に於ては發生原因は既に將來の滅亡の萠芽を含んでゐるのが常である」といふ點にある。而も「人間的自由感情の安心のために」、附加してゐる、「宗教的及び倫理的に優れた如何なる國民も、それが最高の善を保持する限り、而して勿論それを失はない限りに於てのみ沒落したことがないといふ事が確く信ぜられ得る[42]」と。

最後に世界史的考察について一言すれば、彼は、諸國民は人類として結合され、それを一全體として觀察する立場の存在を否定しない。けれども、神の計畫を我々はうかゞひ得ず、而もその立

42) a. a. O. S. 865–67.

場は多く歴史構成の誤謬に陷るからとて、彼は世界史觀の樹立を斷念する。それはとも角、こゝに彼が世界史進行の結果としての世界國家の可能性について述ぶる所は興味がある。曰く「殆んど充分に世界諸國家體系にまで擴大し得る所のヨーロッパの諸國家體系も亦過少視さるべきではない」[43]と。

四

以上ロッシャー國民經濟學の對象規定としての國民經濟觀の叙述を終つて、以下吾々の國民共同經濟の立場から若干の批判を附加する。その際問題となるのは彼の思想を一貫せる神祕主義・有機體說・非辨證法的思惟・及び具體的史觀並に實踐哲學の缺如・等である。吾々はこの觀點から彼の人間觀的・社會哲學的・並に歴史哲學的基礎の各々について吟味して行かう。

(一)ロッシャーが、從來利己心のみが支配するかに考へられた經濟生活域に公共心の契機を採入れた點は一進步であるが、それを「吾々の內部に於ける神の聲、卽ち良心の要求」と解した點には問題がある。それは公共心と同一に解されて妨げない樣に思はれる、然し何故ロッシャーは公共心の底にさうしたものを認めざるを得なかつたか、さうすることが必要なのか否かについて私の考は定まつてゐないので他日の熟考に待ち度いと思ふ。又彼は利己心に對立するのは良心であつて、その統一が公共心であり、二者の間には矛盾はないと考へてゐるが、個人利益が共同利益と分裂してゐる處に於ては兩者は對立矛盾するものであつて、ロッシャーの考へる如く然く調和するも

43) a. a. O. S. 869 ff.

のではない。この點は後に個別經濟と共同經濟との關係に於て詳しく考へる。更に彼は公共心をそのまゝ愛であるかの如く混同してゐるが、さうではなくて、公共心の發達と共に兩者未分前の無自覺的愛が徐々に自覺され來り（市民社會に於ける家庭愛・鄕土愛・祖國愛・人類愛）、この新しく自覺され來つたものによつて逆に利己心と公共心とが眞に具體的に統一されたものが自覺的な愛であると考へらるべきである。自覺愛は單なる自愛でも單なる他愛でもない、自己を否定し他を尊重することによつて自ら生きるものである。そしてこの自覺愛を基礎として初めて具體的な共同經濟が可能となり、その定在は現實的共同富となる。この點に於て、ロッシャーが「財產共同」が眞の愛によつて結合されてゐる人間の間にのみ可能だと言ふのは正しい。然し彼はそれを實現せんとするではなしに、まだ抽象的意志に過ぎざる公共心に基く抽象的共同經濟に滿足する。――尙ロッシャーの公共心は家庭生活から人類生活に及ぶ一切の團體生活の基礎であるが、何故それが國民的範圍に於ける統一體の形成原理となるのか明かではない。この事は國民が文化單位であることを明確に規定しなかつたことに基く。吾々に於ては、愛が、自然・民族・歷史に基く國民性を媒介として自覺せられたとき自覺的國民愛となり、文化の統一的單位としての國民共同體を可能にすると考へる。

（二）社會哲學的にロッシャーが國民及び國民經濟を現實的全體と考へたのは一應正しい。が、それを有機體と觀たのは誤である。結局に於て彼は國民經濟を神の創造に係る有機的生命と考へる、

尤も彼が「說明し難き背景」を科學によつて押しのけんと努力してゐる點は認めねばならぬが。とも角有機體說に對する批判として今日もはや贅言するの要はなからう。

次に國民經濟はロッシャーが考へる程統一的なものであるか。彼は利己心と公共心とを全く調和的に考へ、從つて夫々その上に存立する個別經濟に對して國民經濟は統一的全體であると考へる。然し兩精神的契機の間には矛盾がある如く、それに對應して、個別經濟と共同經濟とりわけ國民經濟との間にも矛盾對立がある。利己心の經濟生活に於ける活動の結果は私有財產であり、公共心のそれは國民の富である。スミス以來所謂「國民の富」とは決して國民共同の富ではない。國民の富は私有財產といふ形で實在し、それから抽象して概念せられた總體が國民共同の富に過ぎぬ。かゝる抽象的總體としての共同の富と其の定在たる私有財產との統一が市民社會に於ける國民の富である。[44] 現にロッシャーも國民の富を云々しつゝ、「財產共同」を原則として否定する。とすれば市民社會に於ける國民の富は共同性といふ觀點からは抽象物に過ぎぬ。この故にこそロッシャーは交換價値が支配する國民經濟に於て國民の富は使用價値によつて詳價されるなどゝ言はざるを得ないのだ。尤も國民共同の富が現實的にも一部分國家その他の公共團體の財產として存在する、然しそれは私經濟的利己心の保證であるか、さうでないにしても多くの場合、交換價値の擔ひ手としてしか國民の使用價値たり得ない。つまり抽象的なる國民共同の富が國民個人の富にまで分配されるのは交換價値を規準としてゝある。だから市民的國民經濟に於ては全體とし

44) 拙稿「アダム・スミスの廉價卽豐富論」本誌、第39卷第6號、96頁

ての國民欲望を國民の總活動によつて充足するなどゝ云ふことは抽象的にのみ考へられるに過ぎず、國民の總勞働を國民の總欲望に對して分配するのは價値法則である。[45] その際矛盾は二重である、第一に分配は必然的であり、第二に國民の欲望といふのは貨幣を媒介とする欲望卽ち所謂有效需要のみである。[45] かくて眞の國民共同體に於ては具體的統一意識がなすであらう所のものを、市民社會に於ては無自覺的必然の社會法則が代り行ふ。この點ロッシャーが有機體說的にではあつたが、市民的國民經濟を自然發生的だとしたのは正しい。併し之を忘れて國民經濟は計畫的であると考へ、その意志性を國家等に見るのであるが、國家意志は、彼自身認むる如く完全に自覺的でないばかりでなく、更にそれが市民的である限り、この必然法則を前提とし、それを補整するに過ぎない。それが眞に具體的となるのは、それが完全に社會法則の支配を止揚して國民生活の眞の統制者たる具體的國民國家となつた時に於てのみである。その萠芽はある、然しそれはまだ卽自的である。だから國民勞働力を總體として意識的に活動せしめてはゐないし、又國民の欲望は決して充足されてはゐない。失業者や農民等の食へない國民大衆の存在はこの證左である。にも拘らず、經濟學者は市民的國民經濟を以つて統一的全體なりとするならば、それは事物の眞相を隱蔽して國民を瞞着する者と言はねばならぬ。

而して同時に吾々はこゝに立止まつてはならぬ。そこにも猶吾々は全體的共同的なるものが自己を顯現しつゝあるを見る。一方に於てはたゞ一の指令によつて全國民の欲望充足に役立つ樣な

45) ロッシャーはこの分配の原理を「分業の法則」だと考へる (Grundress. S, 9). 然し分業が自然發生的である限り、分業を支配するのは結局、勞働力に對する需要供給の價値法則である。
46) A. Smith, Wealth of Nations, ed, by Cannan, vol. I. p 60.

具合に生產力は生產の命令を待機し、富は國民的規模に於て生產、集積されてゐる・他方共同利益のために勞働・富の分配を調整しつゝある國民意識がある。だから市民社會的關係を剝奪すれば、國民經濟に關する命題はそのまゝ妥當する。然し市民社會關係が存續する限り上の如き命題は云はゞ抽象的普遍に止まる。この點に於てロッシャーが租稅・公用徵收・公共事業の團體經營(國家・都市・會社)等によつて財產共同の卽自的に實現されつゝあるを見て、吾々は「國民的財產共同 nationale Gutergemeinschaft」に一層近寄つたと主張していゝと言ひ、又將來も國家の力によつて實現されるであらうと述べてゐるのは正しい。乍併、彼はそれを自覺的・實踐的に實現しようとは意圖しないのである。――又ロッシャーは現實に於ける國民經濟の個別經濟と抽象的共同經濟との分裂に目をふさいだが故に、利己心に基く個別經濟の運動が――それは萬人の萬人に對する戰爭であることを認めながらも、公共心によつて共同經濟にまで宥和されると調和的に考へたが故に――必然的に階級對立に導くことを看過した。卽ち國民を考へる際階級を抹殺してゐる。現實には分裂したものゝ同一性を直接的に主張するのは全く抽象である。その眞の統一は全體意識をもつたものゝ自己解放によつてのみ可能である。從つてそれは單なる觀念上の階級止揚ではなくて、實踐的止揚でなくてはならぬ。かゝる實踐に於ては、階級對立の發展が形成しつゝある協同的(コルポラティーフ)なるものが國家の力を媒介として共同的(ゲマインシヤフトリッヒ)なるものへ高められるのである。階級對立其ものゝ發展による共同體の無自覺的準備についてはロッシャーの夢想だもしなかつた所である。

尙、ロッシャーの國民經濟と世界經濟との關係について說く所は極めて少く、吾々の考へを進

めて行く上の媒介とするには餘りに乏しい。又吾々は國民共同經濟の立場が世界經濟に對して如何に態度するかを積極的に述ぶべき餘裕を與へられて居ない。だからこの點については改めて考へ度いと思ふ。

(三)歴史哲學的にロッシャーは一應、國民・國民經濟が諸國民生活域の間の相互作用によつて、又より進んでは生と制度との辨證法的關係によつて、又時には利己心を代表する舊きものと公共心を代表する新しきものとの鬪爭によつて、歴史的に發展すると考へたかにも思はれる。然し彼の根本思想は、國民經濟は有機體にして、その有機的生命の故に發展し、而もその發展は有機體の發展法則に一致するといふ點にある。然し低級なる有機體から高級なるそれへの生物學的發展と、低い社會形態から高いそれへの歴史的發展とが異ることは言ひ古されたる批判である。彼は國民も國民經濟も他の有機體と同じく永遠の絶對者に對して有限なるが故に消滅すると說くのであるが、そこに吾々は、古代ギリシャ・ローマを典型として國民はその歴史的使命の遂行と同時に滅亡して行くと說いたヘーゲルと同樣の考へ方を見る。乍併、發生・發展・消滅するのは國民そのもの、國民經濟そのものではなくて、それらがとる一定の歴史的形態に過ぎぬ。この意味で今沒落に瀕してゐるのは國民經濟そのものではなくて市民的國民經濟である。然るにロッシャーはこの市民的國民經濟沒落の怖ろしき結論や現實の傾向の結果を恐れて人間的自由感情の安心のために、倫理や宗教に救を求めて市民的國民經濟の永遠ならんことを確信する。だが吾々はその沒落を神かけて祈るに及ばぬ。それは新しく生れるために死するのである。而も新しく生れるのは

決して自然必然的にではない。そこには沒落の可能もある。たゞ死んで生きんとする國民自身の命がけの實踐のみが國民共同經濟を創造し得るのである。かうした實踐をロッシャーは認めない。從つて彼は正しくも過去と現在に於ける財產共同の存在を承認し、而も將來に於けるその擴大の可能を豫料しながら、歷史は市民社會によつて破壞されたものを回復しつゝあるといふこと、卽ち歷史は共同體から共同體へと動きつゝあるといふ明確な史觀には到達しなかつた。――國民の歷史についてはまだ生物學的意識を以つてその發展を定式化した、然し世界史についてはそれが神の計畫だとするも吾々の有限性を以つてしてはそれを覗ふ由もなく、而もそれは統一的な有機體だとも認め難かつた。これが彼の世界史觀放棄の實際の理由である。そこに吾々は歷史を高調しながら具體的な世界史觀を有たなかつた歷史學派の一特徵を見るのである。

右に述ぶる如くロッシャーは歷史を實踐的に理解しないのであるが、かゝる考へ方は彼の思想を一貫してゐる。彼は、あるがまゝの人間は利己的であると同時に公共的であり、與へられたる國民經濟は個別的であると共に共同的であると觀ながら、それらを具體的共同的なるものへ高め得るものとして、實踐的に把握することをしない。蓋し彼に於ては人間は有限にして國民經濟の發展は必然的なるが故に、理想は人間的弱點をもち人間の實踐は無力であるからである。成程、彼が單に現實の人間を見て言つた、倫理や宗敎によつて公共心が强化されねば「國民的財產共同」は危險であり眞の國民共同經濟の發展は望み得ぬといふ事は正しい。然し同時に國民共同經濟の實現といふ國民的實踐が却つて人間の精神を變革する、卽ちかゝる國民經濟的實踐こそは多くの

偉大な思想家が說き來つた絕對愛の境地を國民的規模に於て、更にはそれを基礎として人類的規模に於て實現するための不可缺の前提であり媒介なのである。彼はそこまで考へぬ、つまり彼の問題は與へられたまゝの人間・國民・國民經濟を解釋叙述することであつてそれを變革することではない。そこに市民社會的なるものを變革することではなくてそれを發展せしめ保持することを使命とした歷史學派の國民主義——市民的國民主義——とそれを變革せんとする現代國民主義との本質的相違がある。かくて吾々は右に英國流の個人主義を、左に社會主義を控えて、國民主義によつてその統一を圖らんとしつゝも、結局市民社會の要求に迎合して市民的國民主義に墮して行つた歷史學派の一般的特徵を、その最も有力な創設者の一人たるロッシャーに於てうかゞひ得るのである。

要之、市民的國民經濟が歷史的結果であること、そこには單に利己心だけが支配するのではなく公共心も働き、從つてそこには卽自的に國民共同經濟の面があることを認めたのはロッシャーの正しい點である。然し彼が、市民的國民經濟そのものがまた將來への歷史の進行から見る場合一の歷史的段階に過ぎぬことを自覺し得ず、一方に於ては公共心を高調することによつて市民社會の眞實を看過し、他方に於ては利己心を辨護し國民愛を無視することによつて眞の國民共同經濟を低く評價し、而も抽象的にあるものを具體的にあるかに誤つてそれが自覺的具體化を企圖しなかつたことは、謂ふ所の國民經濟をして全く抽象物たらしめる。さうではなくて、この抽象的國民共同經濟を具體的に實現することが現代國民主義的經濟學の使命でなければならぬ。